

一九二〇年代後半の与謝野晶子について

——中国との関わりを視座として

司 亜 娟 ・ 和 田 勉

I 中国語版の『与謝野晶子論文集』について

1910～20年代の日本も中国も、様々な女性差別の存在することが社会的に認知されるとともに、新しい生き方への女達の模索が始まった時代でもある。与謝野晶子はあたかも時代に押し出されるかのように、女子論や女子教育論を世に問い、評論家としての地位を確立していったのである。彼女は中国とも不思議な縁があった。近代日本には数多くの文学者が活躍したが、中国と関わりを持った女性作家はそう多くない。例外は与謝野晶子である。

日本に留学した魯迅や郭沫若らが中国に新しい思想や文学をもたらしたのと同じように、一人の留学生張嬾が晶子の論説を読んで中国に帰国後、二十数編の評論を翻訳し、『与謝野晶子論文集』という名で上海開明書店より1926年と1929年に二回も刊行された。百六十頁あまりで、定価大洋五角、当時では決して安くない価格で本屋に並んだ。中国語版の『与謝野晶子論文集』の中に紹介された論説は社会批判、とりわけ女性問題の評論が大半をしめているが、翻訳点数、波紋の大きさにおいては群を抜いている。日中近代文学、文学交流史において極めて興味深い現象である。

与謝野晶子の翻訳紹介は、中華民国江蘇蘇州の女子学校の教授である張嬾が、手がけた仕事のひとつであった。彼女のほかにも女子留学生達は女性運動に新風を送り込んだ。彼女らは女性の正当な権利を獲得するために、言論活動に加わり、女性運動の先頭に立った。

訳者張嬾は中国語版の『与謝野晶子論文集』の「序」に以下のように書いている。

「夫人的論文雖然她自己說是專在那便於国内読者閱讀的意識之下写成的但因為中日的国情差不多完全相像其中尤其如家族制度重男輕女等等幾乎在同一的模型中所以我們雖然說這集中所取的論文是特別為我們中国而作也沒有什麼不適合。」

古い中国語を使っているので読みにくいですが、張嬾が晶子の論文に大変共鳴したことが分かる。夫人（晶子）の論文は日本国内の読者向けと言っているが、近代日中の国情は同じ点が多いということで、作り上げたと述べる張嬾。これは晶子の論説を翻訳

した最大の理由である。男尊女卑の時代で、きっと中国の女性にも大きな勇気を与えたのであろう。また中国の周作人は晶子の「貞操論」、黄幼雄は晶子の「女子的経済」等等、当時有名な作家達の翻訳も結構出ていた。晶子の評論が歓迎されるという事は事実である。

この論文集の「原著者序」には、晶子の張燦あての手紙が載せられ、訳者の日本語を評価した上、漢文の重要性や両国民、特に青年の交流、理解など訴えた。

「十六世紀到十九世紀初葉雖偶爾有少数女子能写作漢文的然已經不是時文不過摹擬千年以前的古文進到這世紀便完全沒有了我常想像這樣隣接而又同種的兩国的人男或女都不解对手的国語決不是親善之道然而我自己也是不能懂中国的時文的人。」（晶子は日本の女子が中国時文を勉強しない、隣国だから男女を問わず、もっと国際親善すべきと指摘した。）

最後には「最後我祈望依了這譯文的廣被閱讀對於中日兩国的親善有幾分的貢獻我也將盡我的微力所能謀自己国内理解貴国現状的人們日益增加我更深望貴国的青年不要太偏於急激狂躁的改革且应该愛重一点三千年來高貴而且美麗的古典的傳統」と述べた。⁽¹⁾

晶子はこの論文を通じて、日支親善に貢献できることを願い、中国の若者は国家改革に夢中になりすぎて、三千年の美しい古典文化を忘れてはならないと強調した。具体的な時期は書いてないが、1925年前後だと思われる。晶子が中国に対し、中国の若者に対し、晶子の情熱が伝わる手紙である。目次の次は写真も掲載され、大変読み応えがある一冊である。

晶子も日本の若者に対し、晶子全集第19巻の評論感想集の中に、「支那に関する知識」という論説がある。

「学校でも支那の近代史は西洋史ほど詳しく説かれず、また支那史に精通した教師も尠く、生徒もそれに興味を持たない習慣になつてゐる。私は之では間違つてゐると思はれてならない。国交と貿易との利害からも、隣同士が親み合ふ人間的情味からも、思想や趣味の交換も、日本人の多数が英語を知る程度以上に支那語を知り、引いては支那の事情に通じてゐることが当然なやうに思われる。(一九二五年一月)」

1920年代、社会主義の中国を作ろう、人民こそが国の主役という思想も中国では芽生え始めた。中国の社会状況が国民党と共産党、混乱する一方で、晶子も様々な状況

に対し、不安を覚えた。日本の若者も「日支親善」に目覚め、支那の知識を増やすべきだと指摘した。教育家でもある晶子は、早くから支那語つまり中国語の重要性に気がついた。日本人はあまりに支那の事を知らなすぎるという事を批判し、両国の親和を提唱したのである。当時晶子の鋭い論説が多く出ている中、張嫻はこれらを読んで、共感を覚えたに違いない。この時代の張嫻の翻訳と晶子の優れた思想の両者について検証したいと思う。

社会主義は天皇中心主義の日本では非国民的思想と思込まされていた時代、与謝野晶子自身は明治の終わりごろ、婦人雑誌『青鞥』の賛助員になって、活躍していた。主として北欧文学の学習から、婦人の覚醒を通じて、思想的にもこれを究める晶子。彼女は女流文学の発達を促すとはいっても、その根本に婦人の自覚があり、婦人の自覚はいつまでも文学の範囲に押し込めておくことのできないことを初めから予見していた。婦人自身が因習によって余儀なくされた自己の無智無力から脱することが重要である。その独立解放を実行するにはいろいろの自由を得なければならない。教育、労働、恋愛、言論、参政などの自由は男女いずれにも必要であるが、近代日本婦人の現状の中で第一の必要は、教育と労働の自由である。留学生の張嫻も、この思想を中国近代女性にもぴったり当てはまると感じたことであろう。

早速この論説の全編を翻訳した張嫻。特に文章中の「女の腹は假もの」という晶子の表現に対し、訳者は「女性的腹是借用品」と訳し、「訳者按此語在遺伝学未曾証明以前在男性専制未曾解放以前無論東西各国均以小孩為男子的專有物完全是男子的遺留品」と補足していた。

遺伝学の証明も出てないのに世界各国は、子供は男子の所有物、男子の遺留品と理解している事を書き加えた。その補足には括弧をつけていたが、さらに「这一句俗语是说妇人受孕也不过是小孩暂时的栖息处妇人的腹借给男子使用罢了」と、晶子を書いてないことまで付け加えた。最後の「こゝに私達の知らねばならないことは」に対し、「但是我应当知道的」と訳した。「但是」というのは「併し」の意味で「こゝに」とは違う。以上のような表現が訳文の中に結構ある。

翻訳とは、ある国のことばを他の国のことばになおすことである。晶子の研究者張競が「短文の誤訳も数カ所認められる」と「一部の誤訳」等を指摘されている。⁽²⁾併し私には誤訳と思えない。原文を理解した上での行動であり、中国の事情に合わせて意識的にインパクトの強い言葉で表現しようとしていた訳者の姿が見える。そのまま文章を引用しないで、自分の意見を付け加える。最も中国人らしい行動である。なんと言っても、「女の腹は假もの」という文章表現は中国人もよく使う表現で、親しみがあ

った。また「我君様」に対し「君王」と翻訳し、「なぜに女の腹は假物であるかと一步…」に対し「為什麼婦人的腹是借用的呢?…」と「?」をつけて翻訳し、中国の読者に解りやすく伝える努力が見える。

一方、晶子は中国語版『与謝野晶子論文集』の「原著者序」に書いているように、「然而我一向以為翻譯乃是創作的一種的我相信原文缺乏價值的我的述作在訳文加了你的精神内容與措辭可以非常的被醇化被美化的」。晶子の「併し、翻訳は創作の一種であり、訳者は作者の価値の乏しい文章を自分なりに措置したり、内容の精神を美化したり、読者に作品の生命力を感じさせる」という指摘を、訳者張嫻がしっかり受けついたのである。

晶子は「光る雲」の「人口増加の問題」の中で、張嫻訳この論文集について意見を述べた。

「支那蘇州の張嫻女史からその翻訳に成る『与謝野晶子文集』の新刊を贈られた。私の感想録が女史の才筆に由つて支那に訳され、彼国の若い人人の目に触れる所となつたのは全く意外の幸ひである。(中略)初めて出来たこの支那訳に殆んど全く間違ひを発見しないのは嬉しい事である。日本語特有のニュアンスが出ないのは当然であるが、意味はよく伝へられている。(大正一五、一一、二〇)」(全集第十九卷)

以上の晶子の発言から見ても、二人は面識があつたかどうか推測できないが、張嫻の翻訳について研究した事が分かる。晶子全集第十七巻の「女人創造」の中の「聡明な男子達に」という論説について、翻訳と対比すると、中国語の訳では、所々で省略されていた。比較的長い文章を削除する原因について訳者張嫻は述べていない。省略された文章を読んでみると、日本の国内事情に触れたり、固有名詞が出たりした文章で、当時の日本の実状を知らないと理解しにくい部分である。晶子の論じたこの文章を翻訳しても、逆に中国の読者に混乱を招き、役に立たないのではないかと訳者張嫻は判断したのであろう。全文を読んでも、論旨の伝達には殆んど何の支障はない。中国社会における実用性を考えて翻訳された、この中国語版『与謝野晶子論文集』は晶子にも伝わっていた。

「聡明な男子達に」の中の「男尊女卑」と「家族制度」等、女性を抑圧した旧思想は大分和らげたとは言え、今もアジアの国々を苦しめている。日本も中国も、乃至世界の女性は子供を産む機械ではない、理性を持って婦人解放を望むべきと訳者張嫻はしっかり晶子の思想を中国の読者に伝えようとしていた。

女性は自分の生活を徹底した道理に照らされ、導かれて、正しくかつ堅実に進めて

いく理性が回復したら、自由も独立も握める。晶子の論説の活力と新鮮さに驚き、晶子の論説に対する評価に驚き、張嫻は日本人読者と同じように、晶子の魅力に惹かれていく。女性が完全に独立するためには、高い程度の教育を男子と対等に受けなければならない。教育という意味は学校教育のみを指すのではなく、むしろ一生を通じて間断なく自修独学の心掛けを以て自分が自分に教育をする意味なのである。自己を磨いて思想と実行とを自由にするためであるから、一般の若い婦人を通じて実践すべき努力であるが、その上に現代婦人は経済上の独立を安定にするために、自分の天分を生かし、学問、技術を専修する必要がある。

ところで、1914年に第一次世界大戦が始まった。日本は中国に対し、「二十一ヶ条約」を要求、中国の世論は硬化し、各地で反日運動が発生した。有名な「五・四運動」がおきた。中国は今でも「五・四運動」は反帝、反封建の革命運動と評価し、プロレタリアートの指導による新民主主義革命の起点としている。

この第一次大戦中、西欧列強は中国への圧力を弱めなかった。その間、中国民族資本が発展し、ブルジョア革命を進めようとする勢力が増大した。軍閥混戦という現実の中で、政治改革は容易に進まなかったが、社会改造、特に家族制度や教育などの改革へ関心が向けられた。家族制度の改革においては、本人の自主的な意志による結婚などが主張され、女性の家庭内における地位の低さが問題視された。教育制度においては女子教育の必要性和、高等教育を女子にも開放する要求が出された。

教育家である晶子は「女子と高等教育」というテーマだけで、1917年、1918年と1925年に三回も論説を出した。晶子は教育に対する関心が高い。

「高等教育とは学者を作ること無くて、愛と聡明と力行とに富んだ美しい堅実な人格を作ることだと思ひます。(中略) 自己の修養と訓練とが男女の性別を超えて、人類に共通して必要な真の高等教育で無ければなりません。老子は『大道は夷なり、而も民は徑を好む』と云ひました。高等教育を論じて大学教育に拘拘たるやうなことは枝葉です。徑を好むものだと思ひます。大道的な高等教育の意義さへ徹底して解れば、大学の開放の如きは自然に其中にあります。(一九一八年九月)」⁽³⁾

この論説も、同じく中国語訳の評論感想集『与謝野晶子論文集』に収められている。晶子のこの頃の執筆量は、目を見張るものがあり、評論集の単行本だけ取り出しても、七年間で九冊(十六冊中)と集中している。1915年から1921年まで、つまり晶子の37歳から43歳までのことである。一方で、留学生の張嫻は両国の影響を受け、両国の為にも女子に教育を受けさせるべきと考えたと思われる。理性がある女子を育て、男子

と同じく社会の政治、経済に関わって、祖国を救ってほしい。これが晶子の「女子と高等教育」を採り上げた最も大きな理由であると思う。

「高等教育とは学者を作ること無く、愛と聡明と力行とに富んだ美しい堅実な人格を作ることだと思ひます。」に対し、訳者張嫻は自分なりに訳したのは「高等教育的目的也不是想做一学者要在做一个愛聡明力行富於美而有堅実的人格の『我』」。

『我』とか原文にないことを書き、少しでも読み手に解りやすくする工夫が観察できる。

また老子の「大道は夷^{たひらか}なり、而も民は徑^{こみち}を好む」を中国語の老子の名言、「大道夷而民好徑」に訳し、高等教育というものは、大学の教育に拘らず、大道の高等教育を徹底的、明白的に受けたら、大学教育には自然に向かえるものだと老子の思想を引用した。所々で晶子の漢文学についての素養の深さも見える。

併し、この論説の中国語の訳では、晶子の「(前略)そこに新らしい社会制度を建設する理想が生じて、これまでの社会制度の中にある不用なものや有害なものに気が付き、一一それを改廃しないで居られなくなります。現代はこの理想の自覚の最も顕著な時代であり、併せてこの理想の実行の最も勇敢な時代であると思ひます。」と少し違いがある。翻訳の「失敗」とも思われる。

張嫻の中国語訳では、「那么就能建设起新社会制度的理想来现代是已到了改废一切社会制度中无用的和有害的部分而为自觉的理想的最显著的时代了并且是实行理想的最勇敢的时代了！」と訳した。論説の中の「一一」を中国語の「一切」に訳し、意味が違って来る。中国語の「一切」とは「すべて」、「何もかも」の意味で、ここの「一一」はひとつひとつの意味で、過程を表している。しかも、原文の中の「現代」という訳も省略され、尚更不透明な意味になる。

晶子が言うように「翻訳は一種の創作である」が、この中国語版の与謝野晶子論文集ではそういう「失敗」も多く見られ、正しく中国の読者に伝えていないのではというのが正直な気持ちである。併し、中国の読者が晶子の先端的な女性論の影響は確かにしっかりと受けたに違いない。

II 歌文集「満蒙遊記」について

近代日本の歴史は、当然のことながら、文学や思想の領域をふくめて日本の内側から見るだけでは本当の姿はわからない。日本の近代化は、西欧における近代化の波が東アジアに及ぶことによって決定的になった。近代日本の発展は、日本によるアジア・太平洋への侵略の歴史を抜きにしては考えられない。つまり近代日本の歴史の本当の

姿を知るためには、近代日本の歩みを地球的視野から、少なくともアジア・太平洋の視野から見ていくことが必要である。日本近代文学の歴史も同じで、広い範囲から見なければ、正確とは言えない。だから与謝野晶子も違う角度から見てみる必要がある。

日露戦争が終わってからも、軍部は引き続き軍備の拡大を推し進めた。「満鉄」の発足をテコにして、日本資本主義は飛躍的に発展した。鉄道だけではなく鉱業、電気、通信、水運、学校運営、倉庫業などまで兼業し、日本帝国が関東軍と並んで中国東北部支配に楔を打ち込んだような鉄道であった。とりわけ、軍需産業を中心とする重工業部門の発展は著しかった。満鉄をめぐる、色々な事件が起こるのも仕方ないと考えられる。野望と欲望に満ちた時期であった。

20年余り経て、晶子は夫寛と共に、満鉄の招待で、東北地方「満州」・「内蒙古」を旅行した。1928年5月5日から6月17日までの40日間余りの長い旅であった。満鉄の広い意味での宣伝工作の一つであった。満鉄は開業(1907年4月1日)以来多くの方々を招いて、日本国民の関心を引いた。ちなみにこの時期に招待を受けた作家・歌人・画家などは、作家夏目漱石・志賀直哉、元老伊藤博文(1909年)、歌人では島木赤彦(1923年)・斉藤茂吉(1930年)、詩人では野口雨情(1926年)・北原白秋(1929年)がいる。与謝野夫妻と親しかった画家の正宗得三郎・有島生馬(1927年)が「満州」から北京への旅行をしていた。

晶子より二年遅れで、斉藤茂吉も満鉄の招待を受け、満州と北京を訪れ、七百余りの歌を作っていた。茂吉の場合、晶子一行の華やかな旅行とは違い、一人だけの案内人との満州の旅である。僅か二年の間に、日中関係悪化に連れ、満鉄の経済力も衰えた事は事実である。しかも茂吉は『連山』を発表するまで10年もかかり、旅の翌年、1931年の「満州事変」や世界大戦などを経て、茂吉自身も時代背景を考慮しながら、歌を整理したと見られる。大連を旅した時の歌も多く掲載されている。

日のぼりて美しき光足らへれば大連の海鳥ひるがへる
星が浦の白波寄するゆふぐれを日本人と共^{やうじんくわじん}洋人華人

大変解りやすい歌で、茂吉は中国語の響きに耳を傾け、大陸的景観に目をみはり、文化、歴史に思いを馳せながら、歌の表現に新たな工夫を試みた。只、この七百余りの歌の多くは自然をリアルに捉えた歌で、回想しながら日本の読者に想像を膨らませる意図が見える。晶子夫妻と比べ質素な旅で、寛のように厳しく現実を語ることも無いようである。

晶子夫妻の旅を詳しく見てみよう。先ず、『満蒙遊記』の巻頭「満蒙遊記の初めに」

で寛はこう述べている。「此書の装幀は、友人正宗得三郎君の筆を煩はした。君もまた我等より早く前年の秋に、有島生馬君と共に満蒙及び北京に一遊せられたのである。」

同じように満鉄から招かれたこともあって、晶子夫妻が装丁などを正宗にお願いしたのではないかと思う。本の表紙に、人間は馬車に乗って、馬夫がいて、馬車の影もあって、皆日の昇る所に向かっている様子である。馬車と遠景の山の色は淡い青色で統一し、大きな車輪と馬夫の帽子は淡い黄色で統一している。馬車の窓も二つあって、同じく黄色で、晶子夫妻が乗っていると思わせる、素晴らしいスケッチである。表紙の真中上は草書で「満蒙遊記」、左下は「与謝野寛、晶子」と書いており、何もかも一致して、長閑な風景が目に見え、何とも言えない繊細な筆遣いと調和的な色遣いである。正宗得三郎はもちろん、晶子夫妻のセンスと心境も覗かせる。

満蒙の旅行の記念に、二人の詩歌と印象記を一緒にした『満蒙遊記』なる著書を、昭和五年五月に大阪屋号書店より刊行した。本の体裁は四六刊、表紙、背文字、扉の署名は寛、扉には『附満蒙の歌』と添えられてあり、次頁に寛の「満蒙遊記の初めに」という四頁の文がある。本書は『満蒙遊記』の書名で、寛、晶子の詩歌文集である。紀行文の後に、寛の歌『満蒙の歌其一』と晶子の歌『満蒙の歌其二』、それぞれの歌が掲載されている。本書は三百四十四頁であるが、二百十二頁から、二人の歌が一頁に四首載せられている。最後には寛の漢詩が載せられて、『満蒙遊草漢詩』という書名で、十二頁である。なおこの「遊記」の性質上、満州、蒙古の地名、駅名、川の名、寺の名などが多く出て来るが、これらが当時どのように表記され、読まれたか決定し兼ねるものがあった。半世紀過ぎると、今の中国でも場所の名前は時代によって変わる可能性がある。又、全体で四十八枚の写真が挿入されており、少しでも読者に、その場の雰囲気を解らせて、読みやすくするためであろう。本来歌の独立のため、紀行文などと切り離して、読まれるほうが良いと思われるが、かえって一体感があって、与謝野晶子の作品の中で、最も読みやすいのではないかと思う。

出発の前に晶子は次のように書いている。

「私は近く良人に附いて満州と北京に行きます。良人は何かと調べる学問上の用向を持っていますが私は唯だ随意に歌を詠めばよいと云ふ条件のもとに招かれて行くのですから、全く有難い旅行をさせて頂くのです。この序に、私の殆んど知る所のない支那の自然と人事の一端にも触れて来たいと思います」

与謝野寛も「満蒙遊記の初めに」の中に述べている。

「日本人が先史時代から永久の未来に亘り、いろいろの意味で交渉の最も深い隣国の現状について、余りにも迂闊であるのは愧かしい事である。明治以来の応急の必要が、海外の知識と云へば、欧米の其れに偏せしめたのであつた。今はその偏見の革正せらるべき時である。日本人の視点は^{ちか}邇きに向かつて照準されねばならない。」

また当時の「日貨排斥」についても「個人と個人、民族と民族の心からの親善融和は、唯物主義と強権主義の外の問題である。それは相互の抽象的論議に由ることでもない。何よりも愛と趣味に和らげられた気分感情の交響に由つて培養し実現せらるべき問題である。」と冒頭に書いている。

それは当時の与謝野夫妻の考えであつた。「気分感情の交響」とは言い換えれば「文化交流」とでも解釈できる。日本人は隣国の気分感情を読まねばならないことを、寛は提唱していた。「日中親善」の重要性を訴え、「親善融和」の気持ちを持って旅に出た二人であつたに違いない。

「自分は妻を携へて満蒙と北京とへ旅行することになった。二人とも久しく教壇と書齋との間を往復する生活に固定していたので、俄かに籠を放れて羽を伸ばすやうな気持である」と『満蒙遊記』の「出発と船中」の中に寛が述べている。

この時小さい子供達は学業が順調に進み、大きい子供達は安定した職を得て、相次ぎ結婚し、孫までいた。ヨーロッパ旅行の時は子供も小さいため、旅費、生活費も工面するのに苦労したが、今回は満鉄の招待で、そういう意味では何の心配もない旅であつた。支那の社会情勢が不安とは言え、晶子に課せられた責任とも言うべきものは全く無かつた。本当に伸び伸びとした心境で、作品を作るには持って来いの環境であつた。

いよいよ、五月五日の夜、東京駅出発、六日神戸出帆のアメリカ丸に乗船、五月九日朝大連に着く。今では考えられないが、ほぼ四日もかかったのである。実質旅の期間は、一ヶ月余であつた。

『満蒙遊記』での記述に拠ると、旅行の概略は七日間の大連滞在後、金州以北の記までは寛が記している。そして、それ以後について晶子が記している。つまり、南山、金州、熊岳城、営口、大石橋湯崗子と千山、遼陽、安奉線車上、安東、五龍背温泉、奉天驛の印象、四平街へ、四平街、内蒙古に行く、洮南、洮昂鉄道車中、昂昂溪驛、斎斎哈爾、嫩江の一夜、昂昂溪の宿、東支鉄道車中、哈爾濱の五日、長春へ、吉林、再び長春へ、公主嶺、奉天に著く、撫順、奉天の五日、大連と旅順、帰路についてである。約三十編の紀行文を載せている。満鉄の滞りのない案内を得て、四十日間の旅

は楽しいものであったようである。満鉄の招待であるから当然だったかもしれないが、豪遊であったと言える。この紀行文は、大連、旅順をはじめとして千山の雄大さと中国の歴史などにも触れて夫妻らしい筆法で綴られている。旅先の場所を見ると、行動範囲の広さに感心した。四十日間とは言え、満鉄の応援が無ければ、果せないものである。以下の地図は中国の東北三省、黒竜江省、吉林省、遼寧省で、自分の手書きで追加の分と矢印も含め、晶子一行の足跡が見える。(地図はインターネットの中国東北地図「極限自駕」により、切り取ったもので、奉天は現在の瀋陽である。)



次に旅の途中に遭遇した張作霖爆殺事件との関わりを中心に、晶子夫妻の動向を検証したい。晶子夫妻一行が、齋齋哈爾城外にある満鉄公所に所長の早川正雄⁽⁵⁾も訪ねた。早川夫妻の紹介で、黒龍江省の督辦吳俊陞氏の第二夫人李氏と黒龍江省の警務処所長で猶外に幾つかの要職を兼ねた中將劉得權氏の夫人馬氏と出合った。後に奉天で歴史上有名な、いわゆる「張作霖爆殺事件」に関係ある人物である。この才気と情熱と新知識の教養あふれる両夫人について、晶子は「齋齋哈爾」の紀行文に多く語った。

「吳夫人は世界の新知識にあこがれ、女子教育にも注意を拂ひ、また社会改良、貧民救済などに就ても真面目に考へている人だ相である。その徳望のある事は、省民から『黒龍江省には二人の督軍がある。一人は夫君の吳氏で、一人は吳夫人である』と云はれている程である。(中略)私は満蒙へ来て教養ある支那婦人に会ふ機会が無かつたので、この偶然の会合が嬉しかった。」

また劉夫人も東京で日本語を学び、日本の士官学校を卒業した夫、劉所長の力になっている。「嫩江の景色をお見せする」と両婦人の誘いを受け、晶子達の予定を変更して、劉夫人の水荘「留園」に招かれた。吳夫人の夫は北京に行っているので吳夫人の公邸訪問を遮ったが、一週間後張作霖爆殺事件がおきるとは晶子一行も知る由も無い。また翌日の日程にも合わせて、吳夫人は特別列車を仕立てて、深夜に昂昂溪まで送ってもらった。かなり権力のある人と分かる。劉夫人の水荘は素晴らしい設備と風景に満ちており、その情景を晶子は紀行文の「嫩江の一夜」に詳細に書いている。

「吳劉二夫人と劉氏とは十年の交りであるかのやうに私達を^(ママ)欺待せられた。支那の宴会の接客法だと云つて、二夫人自らの箸で屢料理を私の皿に載せられもした。主人の漢詩が示されたので良人は漢詩を作り、佐藤さんは俳句を、私は歌を書いた。快濶な早川先生御夫妻は私の歌を訳して二夫人に告げられるのであつた。」

中国の二十世紀初め、上流社会らしい遊びである。二艘の船を仕立てて嫩江に遊ぶ、高級の中国料理、酒を振舞われ、最高級の織物などのお土産と、行き帰りの「一団の兵士の捧銃の礼」を受け、貴賓の扱いをされた晶子は「顔の赤くなるのを感じた」と「私は別れを惜んで夫人達と握手しながら、頻りに感傷的な気持になつた。」と述べた。最後の特別列車の中でも料理やお酒など両夫人が用意され、至れり尽せりの旅と言えよう。与謝野夫妻はこの旅について、両夫人について多くの歌を残していた。

与謝野寛の歌

かたぶきて夫人に倣^{ひたひ}ふ額をば嫩江に置く細き月かな
東京に君と逢ふ日を契れどもまた見るべきや嫩江の月

横の詞書には「嫩江の劉荘に、督軍呉俊陞夫人李氏其他と会して、船を泛ぶ」と書いていた。

また晶子も負けないで、多くの歌を作った。

嫩江の岸水^{きし}荘のあるじなる將軍が指す春のかりがね
月夜よし夫人手兵^{しゅへい}をともなひてわれを送れるちちはるの城

夫人達と東京で逢う約束をし、別れを惜しむ晶子夫妻の姿が見える。こうやって、華やかな一夜を過ごし、日支親睦を図ったことが晶子の一番の望みではないかと思う。併し、再び幸せな夜が廻りくる事はなかった。一週間後「張作霖爆殺事件」で、張作霖とともに呉夫人の夫、呉俊陞が爆死してしまい、嫩江の一夜は晶子夫妻にとっても忘れぬ一夜となった。

「国民党の内紛ののち、国民革命軍総司令にもどった蒋介石は、一九二八年四月七日、北伐を再開した。田中内閣は、ふたたび『居留民保護』の名目で第二次山東出兵をきめ、天津駐屯軍のほか、熊本第六師団に動員令をくださった。国民革命軍は五月一日には済南を占領した。五月三日、済南で日中両軍のあいだに衝突がおり、市街戦がおこった（済南事件）。」⁽⁶⁾

結局この「済南事件」で、日本軍は山東省の大半、青島、膠州の鉄道沿線を占領した。満州からも一個師団が派遣され、戦火は拡大の気配を示したのであった。満州事変の前哨戦と言われている済南事件については、寛も「満蒙遊記の初めに」の冒頭に書いている。

「日清日露の両役より最近の済南事件に至るまで、多大の血税と軍費とを犠牲にしなが、それが何の理由に本づいて為され、併せてそれが如何なる効果を生じたかに就いては、国民の大多数は関知しないのである。」

晶子も「奉天驛の印象」の中に同じく意見を述べている。

「我国の山東出兵、それに続いて生じた済南の事変等に刺激せられて、東三省にも起こりつつある排日の氣勢が盛にならぬ間に、内蒙古の一部と北満とを観て置きた

かつたので、(中略) 北京の擾乱がいよいよ私達の北京訪問を許さない事を知つた。既に遼陽で感じた事を、私達は此處でも一層痛切に感じさせられた。」

与謝野夫妻は当時の日本政府の行動について、好ましくないとの考えが読める。北京の情勢は厳しいので、北京の旅を止めざるを得ない。がっかりしたと同時に、晶子は「戦慄する事実の目前に迫っているのに無関心でいられなかつた。さうして日本を世界から孤立させる結果になりはしないかと想像して、心を暗くしていた」と田中内閣を批判していた。

晶子一行の旅は続きながらも、寛の歌「洮南に宿る」の中に歌っているように、緊張感を感じる旅でもあった。

土の城それを衛れる支那兵も沙ぼこりして共に灰色
城の門のあらしの吹くなかに目のみ光れる支那の哨兵

中国国民は「済南事件」で排日の氣勢は日々高くなっていく中、日本政府は思うままに動かなかつたため、独力で「満蒙分離」を実行しようとして企てた。一方、日本軍の干渉にも関わらず、蒋介石の国民党軍は、軍閥の割拠で乱れていた中国の全国統一を目指し、北伐は成功した。日本が援助していた張作霖、東北軍閥の敗北も明らかになった。このとき北伐軍の目指す北京にいたのが張作霖であった。張作霖は北伐軍に追われて、本拠の中国東北部「満州」に引き上げようと北京を離れる。6月4日に日本の関東軍は中国人の仕業と見せかけて線路に爆薬をしかけ、奉天駅に着く直前の列車を爆破して張作霖を殺した。この事件を只管隠し続ける日本政府はとうとう失敗に終わり、田中内閣も非難を浴びて、辞職した。

張学良ははじめは親日派だったが、父親が日本軍に殺されたと知って、蒋介石と手を結ぶようになった。こうした緊迫状況の中で、晶子一行は満鉄のお陰もあって、予定の変更無く、5月30日に長春に着く。翌日、吉林省の首都吉林へ。「山海関」の肥沃な平原と勤労な漢人に感動しながらも、再び長春に戻り、6月3日奉天に着く。満鉄の計らいで駅の楼上にある大和ホテルに泊まる。

晶子は「奉天に著く」というの紀行文に、かなり詳しく当時の状況を書いている。

「新聞を見ると大元帥の張作霖がいよいよ北京を退き、今日天津を立つて京奉鉄道で奉天へ帰ると云ふ事である。それで支那側も在留邦人の重なる官公人達も張の出迎へに忙しいらしい。北京が国民政府の勢力に帰したとすれば、当分は混乱するであ

らうから、私達の北京訪問は全く断念せねばならなかつた。」

大和ホテルで泊まった晶子一行は北京訪問を断念したが、奉天見物を後にして、翌日日帰りて撫順を見る予定だったため、早く休みに入った。併し、翌日の朝晶子はこう書いている。

「翌朝私は早く起きて東京の子供に送る手紙を書いていると、へんな音が幽かに聞こえた。顔を洗っている良人も其れを聞いた。二人は唯だ騒音の多い所へ来たと思つていた。(中略)私達は初めて今先のへんな爆音の正体を知つたと共に、厭な或る直覚が私達の心を曇らせたので思わず共に眉を顰めた。さうして齋齋哈爾で一週間前に逢つた呉夫人がどんなに慟哭せられることであろうと想つて心が傷んだ。」

晶子は「奉天に著く」の紀行文に、日にちや時間帯まで細かく書いている。「奉天は今城内も城外も惶惑と戒厳と混乱との中に在ると想はれた」と述べる奉天の状況。

「奉天の五日」の紀行文に「大井さん⁽⁷⁾が事変に就て聞かせて下さった所は、昨日から私達の直感していた所と大差が無かつた。」と書く晶子。晶子の言う「直感」とは何を意味するのであろうか。具体的には書かれていないが、事変のため「一睡もしなかつた」大井からの説明は、かなり正確な情報だと思われる。この時、混乱の深刻さだけでなく、もう既に「関東軍の陰謀」を感じ取っていたのではないかと推定される。昭和三年六月二日土曜日、つまり事件の前日に「福岡日日新聞」の夕刊、現在の「西日本新聞」、大幅に奉軍の事と張作霖の動きを書いている。

「遺の張作霖氏にも愈退京の悲運来る永く茲一両日の中、昨夜の大元帥府に於ける巨頭会議の結果張作霖氏は一両日中に退京し張学良楊宇霆は尚少時北京に止り一切の善後策講ずる事となつた。」

又「我指定地のみ通過を許可、奉軍敗退と我対策」の出だしにも、「満鉄付属地前に関東州租借地ないに一步も入らしめざる事とし唯我軍の指定地たる地点の通過のみを許す事に決定し此旨中央部より村岡関東軍司令官に対して命令するところあつた」と詳しく書いてあり、日本側の準備が整つたと言えよう。日本の野望が見える。

1927年から1930年にいたる三年間に、撫順炭鉱、鞍山鉄鉱など採掘された石炭と鉄鉱石は三分の二以上が日本へ輸送されていた。東北三省は、日本にとってなくてはならない貴重な資源である。一方、ますます使い難くなつた張作霖の東北軍閥の敗北も明らかになり、この事件は日本の経済侵略、資本侵略も一層難しくなつてしまつた末

での窮余の一策ではなかったか。

あくまでも「平和」を願い、「乏しいながらも或る情趣と知識とに触れることを期待して来た」晶子夫妻は奉天では様々の人と会い、街も錯綜した中、満鉄公所所長の鎌田彌助⁽⁸⁾と同席された。鎌田氏は晶子一行が城内へ来たことを甚だしい冒険だと言い、深刻な状況も告げられた。

「あなた方にはお分かりにならぬが、昨日から此の門前を支那人の云って通る言葉は、我々日本人に対して容易ならぬ怖ろしい事を云っている。久しく此地にいる私達にとって、こんなに支那人の感情の急激に悪化した事は例がありません」

鎌田氏は張作霖遭難の現場へ駆けつけて行った時の光景を話し、ズボンの隠しから幅七分、長さ四寸程の支那のカルタ「紙牌」^{シイパイ}を幾片か出して晶子達に見せた。爆破した列車の中に焼け残っていたのを拾って来たと言う。張、呉の両将軍は列車の中で「紙牌」で遊んでいたに違いない。一方、満鉄公所の中の婦人達を避難させ、支那の雇人も辞し去り、男子の社員ばかり残ったとの事も伝えた。事件の恐ろしさを目の当たりにした晶子は「奉天」の中にこう歌った。

畑青し東三省は滅ぶ無し煩らふなかれよき隣人^{りんじん}よ
その半焦^{なかば}げたる汽車に将軍のもて遊びたる紙牌^{しはい}の白し

「東三省」とは、奉天、吉林、黒竜江の東北三省のことで、張作霖が支配していた満州をさしているが、張作霖らが死んでしまっても、満州はそのまま滅びてしまうわけではないのだから、心配しないで下さいという意味であろう。悲しさの中に中国の隣人に呼びかける強さを感じる一首である。二首目の歌では「紙牌の白し」というところに、事件後の虚しさが詠まれている。張作霖と一緒に遭難した、呉将軍の夫人の悲しみに想いをはせ、「誤りたる呉夫人の訃報を得たりし時」に幾つかの歌が残っている。

わがために柳の枝をさしたりし船を夫人も我れも見がたし
嫩江の月夜とおなじ世とも無き世をたちまちに見たまひし君

船で歓待してくれたことを回想しており、悲しさがひしひしと伝わってくる歌である。晶子のこの事件についての歌は少なくはない。夫寛も「奉天にて」の中に、次の

ような歌がある。

若くして異国を恐れ遠く来て今日この頃は故国を恐る
行き逢へる張督軍の變なども砂ぼこりすと見て過ぐるのみ

晶子の「張作霖事件」の歌に対し、何とも哀しい寛の歌である。遠く満州の地に来て、故国日本軍部の陰謀を恐れるといった意味である。今の自分には、口惜しいことながら、ただ「砂ぼこりす」と見て通りすぎていくだけの事、一個人の力ではどうしようもない時代の大きな流れを感じさせて、味わい深い歌である。また、寛は「大連にて、斎斎哈爾なる李夫人の殉死を聞きて」の中に呉夫人を思う歌がある。

もろともに嫩江に見し夕月はまた照せども帰らざる君
李夫人の死を悲めば冷たくも心に流る嫩江の水

この奉天滞在中に多くの歌を歌った二人の感情の表れで、この事件で旅の計画も変更し、何よりも楽しみにしていた旅が重苦しい雰囲気にも包まれ、心を痛めた。晶子の紀行文の中に書いているように、「私達は是に張作霖の事變に由る日支人間の重苦しい或る不安の気分を交わらせて感ぜねばならなかつた。」とあり、哀愁の漂った一筆であった。

事件に妨げられて北京行きを断念したため、「奉天」の後に再び「大連と旅順」に戻り、日本に帰る決意をした晶子夫妻。何とも後味が悪い旅であったろう。別れを惜しむ、帰国の途についた夫妻の歌もある。寛は以下の歌を歌った。

満州に別れんとして人ならぬ柳と交す最後の握手

晶子も惜しんでいた。

悲しくもこの世ならざるところより霧の寄せくる旅順口かな

晶子は満蒙旅行の前に『与謝野晶子全集』第十九巻の「砂に書く」感想集の中の「支那に関する知識」で、次のように述べている。

「日貨排斥など云ふ事も別な理由があるにせよ、一つは支那に商店を持つている日本人が支那語に深く通せず、それが両国人の感情の融和を妨げ却って反感と誤解と

を支那人に抱かせている事も其一因になつてゐるに違いない。(中略)今後の支那が猶容易に安定を得ないものならますます迷惑を被るのは我国である。日本人は急いで支那に親しみ、常に彼国の事情を明瞭に知ろうと心掛けねばならない。久しい欧米偏重の習慣は大切な日支の親和を疎かにしている。一九二五年一月」

満蒙旅行する前、晶子はもう既に中国文化に傾注し、英語の学習よりも、漢文や日本の古典にもっと時間を費やすべきだと主張していた。特に言葉は勿論国民親和の原点であるから、支那語を勉強する必要があると発表した。

満蒙旅行の後、晶子はまた「両国民の精神的理解」の徹底は文化運動にありと言出し、何にもまして支那(中国)に対する晶子の関心の高さを示している。支那に関する評論も断然多くなってきた。「君死にたまふことなかれ」の単純率直な平和主義者から政治に、軍事に興味と関心を強く持ったのである。『満蒙遊記』を刊行して間もなく、満州事変がおきた。この満州事変についての『与謝野晶子全集』第二十巻に「優勝者となれ」の感想文の「東四省の問題」に次のように書いている。

「今度の満州事變が決して一時の突発でなくて、彼国の軍国政府がその積み上げた排日侮日の思想及び言動に由つて自ら招いた災禍である事の証明となるのである。日本はその排日行為に対して久しく隠忍を重ねた。終に忍び切れずして出先の陸軍が非常手段の自衛策を断行した。この非常手段は決して好ましい事でないが、かやうな措置を取るに至らしめた責任が彼国の軍閥政府にある事は前述の通りである。
(昭和六・九・一五)」

この一文は、満州に対する晶子の基本的考えがほぼ出ていとみてもよい。「満州事変」の勃発は、日本に非は少しもなく、あくまでも「支那」の「軍閥政府」にあること、日本の国は潔白である。何よりも「支那」の国民を助けなければならない。それには「非常手段」は「自衛手段」であり、やむを得ないことである。「支那」は広大な国であるから、一つに統一するのではなく、三、四の国を建設し、連邦制にしたほうが良い。それが「支那」国民の生活の安定につながるものである、という考えであった。当時の複雑な国際情勢を思うと、晶子がそう考えたのも無理ないことであろう。全くの善意で、真剣に満州問題を考えていた。

そして、中国政府の今後の方針にも全集の「東四省の問題」の中で口を出した。

「蒋介石も張学良も快速に善後策を講じないと云ふなら、東四省の支那国民自身が

「独立して初めて国民の実力に基づき平和な新政府を建設し、日本と交渉して真実に鞏固な共存共栄の道を開くがよいではないか。」

併し、日本のこうした大がかりな進攻と蒋介石の妥協的の譲歩は、中国の民衆に抗日反蔣の怒りの火をつけた。東北三省の民衆と学生は、中国共産党の指導あるいは協力のもとに抗日戦を繰り広げた。全国民の抗日反蔣闘争の波は高まり、日本と国民党反動派に手痛い打撃を与えた。この闘争の始まりをきっかけに、共産党の人気も中国国民の中で急上昇した。

晶子の予言の如くになって、間もなく満州国が成立したのであった。しかし、今から見れば共感はできない。当時の国際情勢で中国の内乱と日本の野心でこの事変が起こった。東三省の満州はとりわけ国民革命軍の北伐以降、関東軍を始め日本の帝国主義勢力の画策の舞台となり、日本軍人の陰謀による張作霖爆殺事件も起こり、満州事変の発火点となったのである。

満蒙問題という難問を抱えている日本が中国に対して孤立することを恐れ、英米と共同して中国の国権回復の要求に対応し、さらに国民政府や張学良率いる東三省当局との取引によって満蒙権益の維持をはかろうとした。そして満鉄が、世界恐慌の嵐の中で、中国の国権回復運動もからんで激しい打撃を受けると、居留民の中には強硬論が高まった。危機感を持った日本軍がその「特殊権益」を守るために軍事行動に踏み切ったという点では、現在多くの論者が一致していると言えよう。今、満州事変についての中国での通史『“九・一八”事変史』に統一されている、日本の侵略がエスカレートし、ついに1937年の「盧溝橋事件」から全面の日中戦争に入った。

事情の複雑性が窺われる。晶子は事態を見て以下の発言も出された。

「恐らく国民の総てがさうであらうやうに、私もまた日支問題がどこまで変化し展開するのか、その正確な認識が得られない。現に新聞紙の判断が昨日と今日とで相違している」

少しずつ日本政府に疑問を覚えた晶子であるが、日本国民は「非侵略主義者であり不戦条約の遵奉者であること」は信じて疑っていない。その後、満州事変に始まる戦争の長期化に伴い、反戦・非戦の文学や思想の根が、一気に絶たれる中、晶子の考えに微妙な変化が見える。寛が亡くなり、体の具合もあって論説は少ないが、歌は亡くなるまで作っていた。

目覚めなば強さも得まし富みもせんゆめ悔るな四億の民を（昭11）

心なき人いふ言のめでたさよ産めよふやせよ飲まず食はずにて（昭14）

五ヶ年に三百万の人命をたちてかち得しものは何物（昭16）

満州の野山を開くますらをも桜咲く日は見に帰へれかし（昭17）

生涯にわたり、数多くの歌集を残したのみならず、晶子の中国語版の『与謝野晶子論文集』は中国の人々にも影響を与えた。また、『満蒙遊記』は当時の真実を伝え、晶子夫妻は、歴史の証人にもなった。当時の状況から見れば、後に満州事変、上海事変が起きるのも当然のことであろう。両国民の睦まじさと歴史の残酷さ、終戦六十周年の今、貴重な歴史資料を残してくれたとも言える。事変や戦争など今も続いている中、国民が犠牲になり、国が貧乏になり、文学者の晶子は国民の一人として叫んだ。その叫びは今でも聞こえそうなほど普遍性を持っている。夫妻の勘の鋭さと現実直視の姿勢に脱帽する。一世紀に亘って、多くの人々は晶子の文筆と生き方に励まされ、希望と勇気を与えられた。

註

- (1) 張嫻「女性理性的恢復」（『与謝野晶子論文集』 婦女問題研究会，上海開明書店，一九二六年）
- (2) 張競「晶子と中国の女性運動」（上田博編『鉄幹と晶子』所収，和泉書院，一九九七年）
- (3) 与謝野晶子「女子と高等教育」（『定本 与謝野晶子全集』第十七卷評論感想集四，講談社，一九八〇年）
- (4) 張嫻「女子的經濟獨立與家庭」（『与謝野晶子論文集』 婦女問題研究会，上海開明書店，一九二六年）
- (5) 満鉄公所所長の早川正雄は有数の中国通で、『吳俊陞の面影』（大阪屋号書店，一九三〇年）という本も出版している。吳氏とは早くから「義兄義弟」の親交を続けていた。
- (6) 加藤文三「金融恐慌と山東出兵」（『日本近現代の発展・——下』新日本出版社，一九九四年）
- (7) 大井二郎のこと。朝日新聞の支局長で，局員達と共に事変後の探訪と通信とに取り組んでいた。張作霖事件現場の写真と報道を大阪の夕刊に送った記者である。
- (8) 鎌田彌助は齋齋哈爾の早川氏と同じく有名な支那通である。早川氏が吳俊陞と義兄弟であるように，鎌田氏も張作霖と義兄弟の親交を結ばれている。

〔追記〕 本論文作成後，川崎キヌ子『満州の歌と風土——与謝野寛・晶子合著『満蒙遊記』を訪ねて——』（平18・3．おうふう）が刊行された。併せて，参照頂きたい。